第 27回日本実存療法学会

第9回国際全人医療学会

プログラム・抄録集

テーマ

医学哲学と医学教育

会　期	2022年6月18日(土)10:00－2022年7月4日(月)12:00
形　式	オンライン開催（上記期間中に当財団ホームページ上にて公開）
主　催	日本実存療法学会／国際全人医療学会 公益財団法人国際全人医療研究所

御　挨　拶

第 27回日本実存療法学会および第9回国際全人医療学会を迎えて

永田勝太郎

第 27回日本実存療法学会／第9回国際全人医療学会　大会長
日本実存療法学会･国際全人医療学会　代表理事

昨年に引き続き、今大会もオンライン形式による開催の運びとなりました。ご講演いただきます先生方ならびにご参加者、関係者の皆様に改めて感謝申し上げます。

いま世界は、急速に変わりつつあります。と同時にさまざまな問題が露呈しています。コロナ禍を通じ、それらが顕著にあらわれてきていると実感しています。医療分野においては、iPS 細胞、臓器移植をはじめ技術的な面では大きな進歩がみられる反面、医療の基本である医師・医療職と患者との人間関係、あるいは医療職間のコミュニケーションのあり方については、数十年前の医療と現在のそれとではあまり変化が感じられません。また、現代医療においては、「Evidence-Based Medicine」の考え方を非常に重視し、それに従い医療を行うという風潮が見られます。科学的根拠に基づく医療は確かに重要かつ有用です。しかし、この科学データ偏重の医療には、思わぬ落とし穴が存在します。例えば、身体の状態を正常と異常とに分けて考える場合、果たして正常とは何かという疑問が生じます。また、拠りどころであったエビデンスや定義自体が、時代とともに変化することさえも多々あります。人間の存在は多要素－すなわち身体・心理・社会・実存的要素から成り立っています。それを単純に生物学的視点やエビデンスから、診断名のみで判断することはできません。同じ病名の患者であっても、様相は一人ひとり異なります。その違いを見据え、患者を全人的にとらえ、最善の判断を行うのが本来の医療です。

医師・医療職は、常に、よく考えて行動せねばなりません。そのための規範・基準をふまえたうえで、現実を理解することが不可欠です。現代医療における哲学の貧困という課題に向き合い、その打破に向け、今大会では、「医学哲学と医学教育」をテーマに、各界の先生方とともにそのあるべき姿について考えていきたいと思います。

講演をご観覧いただいた後、皆様からのご質問やご意見、ご感想をお待ちしております。どうぞ事務局宛てにメールをお寄せください（メールアドレス：ifcm@nifty.com）。

プログラム

教　育　講　演

「一病息災」的はたらきを発揮する「医療」を支える「全人」の視点―清の体験から

清眞人（元近畿大学文芸学部　教授）

心の対話を願って～NHK『宗教の時間』インタビュアーの経験から～

鈴木健次（NHK会友、大正大学名誉教授）

特　別　講　演

矛盾的相即と医療

安松聖高（医療法人聖恵会　福岡聖恵（めぐみ）病院　理事長・院長）

シンポジウム

哲学無き現代医学教育の問題点―医学哲学の観点から―

杉岡良彦（一般財団法人信貴山病院分院　上野病院診療部、医療倫理教育部長）

サルトジェネシス（健康創成論）と医学教育－痛み医療の臨床から－

青山幸生（東邦大学医学部麻酔科学講座（大橋）客員教授）

「医のこころ」を伝える場を創る　－ユーサイキアの実現を目指して－

喜山克彦（喜山整形ハーブクリニック　院長）

鍼灸臨床実習における態度教育の展開

廣門靖正（国際鍼灸専門学校附属鍼灸治療所　所長）

機能性身体症状を呈した身体的苦悩（BD）に対し TD チームアプローチを行い行動変容に至った１例

市川亜弥（喜山整形ハーブクリニック　総合リハビリ科・鍼灸師）

市民公開講座

食の専門家育成現場からの提言

井上恵（学校法人長岡総合学園　悠久山栄養調理専門学校　校長）

教　育　講　演

「一病息災」的はたらきを発揮する「医療」を支える「全人」の視点
―清の体験から

清眞人
元近畿大学文芸学部　教授

「一病息災」という言葉がある。一つの病にかかり、しかし、それを転機に自分の体全体を見直し、今まで十分には気づかなかった体の根本問題に気づき、その解決に取り組むようになったので、以後もう大病にかかることはなくなった、という意味である。私はこう思う。「医療」とは、この「一病息災」の観点に貫かれた活動である、と。

ところで、この問題にかかわって、私は「国際全人医療研究所」という名称のなかにある「全人」という言葉に注目している。「全き人間」、「一個の生きた全体・総合体、小宇宙」として生きている個人の在り方、これに注目して医療をおこなう方法を探求する研究所、これがこの研究所だ！そういうメッセージであると私は受け取っている。

最近「心身症」という言葉が目につくように思う。心のストレスと体のストレスとは大いに相関の関係にある。切り離せない。これからの医療は、この両者の相関関係にもっと注目し、その相関作用が良循環となって展開するときに誕生する治療力、これを徹底的に生かして医療をおこなうべきではないか？「全人医療」という言葉は、そう呼びかけているのではないか？そして、私は思う。「心」が発揮する治療力を高めるためには、患者ひとりひとりが心の場面であらためて自分を「全人」化する試み、つまり、自分を「生き生きとした小宇宙」として取り戻し再生させ成長させる試み、これが重要となるのだ、と。

では、そのための方法とは？私には二つの提案がある。一つは、自分の思い出の中で、「あのとき、確かに自分は一個の小宇宙として自分を生きていた！」と実感する思い出、それをあらためて想い描き、それを一番伝えたい人に伝えようとすることである。もう一つは、心を没頭させる何か手作りの世界を持つこと。手作りの絵葉書作り、小さな刺繍入りハンカチ作り、スマホのカメラを使ったミニ面白写真集作り、メロディーやリズムの数小節作曲、

何でもありの試み、一言でいえば、各自が小さなクリエイター・芸術家になろうとする試みに挑戦することである。

実は、私 46 歳のときに悪性リンパ腫に罹り、5 ヶ月の治療入院を体験した。そのときに痛感したことを、かつて『ヴィジョンは〈世界〉をつれて－生きるアートの哲学』（はるか書房、1997 年）という本に記した。そこで書いたことも紹介しながら、以上のテーマについて永田先生と語り合えたらと思う次第である。

先日、ジャーナル誌「全人的医療」に寄稿した論考でフランクルの思想の構造を明らかにする視点として挙げた言葉を使えば、こう言うことができる。―私はその入院生活で「癌治療に陽気に立ち向かっている姿を示すこと」、それこそ私の家族に対する使命だという気持ちを強く持った。つまり、それが私の「態度価値」となったのである。そして、友人がくれた手製の絵葉書に刺激され、自分も、ベッド脇の花たちの姿を模写する絵葉書を手作りし、返事の葉書とするようになった。少年の頃、自分が浸っていた絵を描く楽しみを思い出したのである。そのようにして、私はあらためて「創造価値」の実現に取り組みだした。そして、私は次の考えに目覚めた。芸術は、必ずあらためて一つの「世界」、いいかえれば「小宇宙」を立ち上げようとする人間の試みだ！それは自分が「愛と美」この二つの「体験価値」をまさにどう獲得してきた人間なのかを見つめ直すことなんだ、と。

以上の私の体験と提案は永田勝太郎『実存カウンセリング』（駿河台出版社）の提起する「芸術療法」と「ライフレビュー・インタービュー」に大いに共振するものである。

キーワード：一病息災、小宇宙、心の治療力

プロフィール

◆ 清　眞人（きよし　まひと）

＜略歴＞

1949 年生まれ。1972 年、早稲田大学政経学部卒業。1982 年、早稲田大学文学研究科哲学専攻博士課程満期退学。1987 年来、近畿大学教員。2015 年、近畿大学文芸学部教授を退職。単書は 30 冊に上る。ウィキペディアの「清眞人」参照。サルトル、ニーチェの実存思想の研究を軸にする。近著に『聖書論Ⅰ　妬みの神と憐みの神』、『聖書論Ⅱ　聖書批判史考』（2015 年）、『ドストエフスキーとキリスト教－イエス主義・大地信仰・社会主義』（2016 年）、『フロムと神秘主義』（2018 年）、『高橋和巳論』（2020 年）、『格闘者ニーチェⅠ　ショーペンハウアー』、『格闘者ニーチェⅡ　自己格闘者ニーチェ』、『格闘者ニーチェⅢ　マンとハイデガー』（2022 年）、いずれも藤原書店。なお、フランクルに関しては『創造の生へ－小さいけれど別な空間を創る』（はるか書房、2007 年）第Ⅱ部第 6 章「《生きる意味》についての問いのコペルニクス的転回－フランクルからの問題提起」で論じている。

教　育　講　演

心の対話を願って～NHK『宗教の時間』インタビュアーの経験から～

鈴木健次
NHK会友、大正大学名誉教授

いま、私たちはコロナという得体の知れないウィールスによる、いつ終息するか分らないパンデミックのなかで、大きな不安を抱えて生きている。全日本仏教会の戸松義晴理事長によれば、昨年実施したアンケートで、例年「寺や僧侶に期待することなど何もない」と答えていた人の多くが、檀家であるなしにかかわらず、「コロナの不安に寄り添ってほしい」「コロナが早く終息するように祈ってほしい」と回答しているという。法事や礼拝のために集うことができなくなった一方、これまで寺や教会に足を踏み入れたことのない人が YouTube によって説法や説教を聞いている、といったことも聞く。

だが、価値観が多様化した現代社会で、誰もが既存の宗教に安らぎを見いだすことはできない。長年、宗教学を講じてきた鶴岡賀雄東京大学名誉教授は「私の宗教学の講義は、大学で一番人気があって受講生が多かった、宗教離れといわれる若者も、実は大きな不安を抱えている、だからといって彼らに仏像や十字架を見せると、そっぽを向いてしまう」と言われた。では、何が現代人の弱さを支えることができるのだろうか。

NHK『宗教の時間』のインタビュアーとして、宗教家をはじめ、その生き方に惹かれる方々と心と心の対話を願って聞き出した体験談を紹介しながら、近代的・科学的な分析や知識だけでは解決できない人間の心の領域について考えてみたい。

キーワード：既成宗教の限界、若者と宗教、現代人と使徒信条、裁く神と寄り添う神、神の沈黙と無分別智

プロフィール

◆ 鈴木 健次（すずき けんじ）

＜略歴＞
1934 年東京生まれ。1953 年東京大学入学、1957 年文学部フランス文学科卒業後、同大学教養学部教養学科フランス研究コースに編入、1959 年同コース卒業とともに日本放送協会（NHK）入局、番組ディレクターとして NHK テレビ初の宗教の定時番組と歴史の定時番組（テレビ『宗教の時間』＝改称して現在の『こころの時代』、および現在まで続いている歴史番組シリーズの嚆矢『日本史探訪』）を開発した。番組制作局教養番組部副部長、ＮＨＫスペシャル番組部主管、家庭番組担当部長などを務め、1989 年依願退職。同年、大正大学文学部歴史学科教授に就任、国際文化学科創設に伴い初代学科長。大学院文学研究科比較文化専攻創設に伴い大学院教授を兼担して専攻長を務めた。2004 年同大学を定年退職、現在ＮＨＫ会友、大正大学名誉教授。
この間、地元神奈川県大和市で教育問題、男女平等参画推進などの諮問委員会の委員・座長などを務め、余暇活動推進公社理事長、教育委員長などを歴任した。現在は情報公開審査会委員。

＜主な著書＞
『史料で読むアメリカ文化史』全 5 巻（東京大学出版会、監修/執筆）、『比較文化の新領域』（大正大学出版会、編者/執筆）、『自伝でたどるアメリカン・ドリーム』（河合出版/亀井俊介との共編著）、『鈴木健次対談集・アメリカを読む』（河合出版）、『鈴木健次インタビュー集・作家の透視図』（メディアパル）。共著に、『自由の新天地』（集英社）、『アメリカよ！』（弘文堂）、『地域の世界史 3－地域の成り立ち』（「アメリカン・ウェイ・オブ・ライフ－その形成と多様化」）（山川出版社）。訳書に、『アリステア・クックのアメリカ史』上下 2 巻（NHK ブックス）、アルビン・トフラー『第三の波』（NHK 出版）、シーラ・ジョンソン『アメリカ人の日本観』（サイマル出版会）、バズ・オルドリン/マルカム・マコネル『地球から来た男』（角川選書）など。

特 別 講 演

矛盾的相即と医療

安松聖高
医療法人聖恵会 福岡聖恵(めぐみ)病院 理事長･院長

矛盾的相即の論理は、西田哲学に言う「絶対矛盾的自己同一」を、後に佛教哲学の大斗、中山延二が分かり易く再表現したものである。

矛盾的相即とは、二元論でも一元論でもなく、一つに結びついているということが、同時に二つに分かれているということ、二つに分かれているということが、同時に一つに結びついているということ、すなわち、一にして二、二にして一というあり方であり、不一不二論である。

例えば、医師と患者の信頼関係が深まるほどに（結合が強まるほどに)、同時に医師としての分、患者としての分が生きる。医師としての分、患者としての分が生きるとは、医師と患者が分離され、区別されるということであり、医師と患者の分が生きるほどに（分離するほどに)、同時に医師と患者の信頼関係（結合）が強まっていく。

さて、精神科医が具体的な臨床の場で、人生苦、世界苦の只中で喘ぎ苦しむ患者の救いとなるような、本来の治療を行い得るには、佛教が説く、智と悲が一如として働く、矛盾相即的場所の現成が必須であると考える。

キーワード：矛盾的相即、中山延二、西田哲学、医療

プロフィール

◆ 安松 聖高（やすまつ きよたか）

〈現職〉

医療法人聖恵会　福岡聖恵(めぐみ)病院　理事長・院長

浄土宗清泉山天籟院林松寺　住職

〈略歴〉

1958 年　福岡県生まれ

兵庫医科大学卒業後、産業医科大学大学院修了、産業医科大学神経精神科医局、（医）淡窓会大分友愛病院院長などを経て、

1999 年 7 月　福岡聖恵(めぐみ)病院開設　院長

2001 年 1 月　（医）聖恵(めぐみ)会設立　同理事長、福岡聖恵(めぐみ)病院院長

〈所属学会・専門分野〉

医学博士

精神保健指定医

日本精神神経学会　指導医、専門医

産業医科大学医学部医学科　非常勤講師

〈共著〉

『心の痛みの癒し-高齢化社会への仏教的アプローチ-』（同朋舎、1999 年）

〈論文〉

・乳児の脳波に及ぼす母乳とオレンジの香りの影響.Journal of UOEH（産業医科大学雑誌）16(1):71-83, 1994.（共著）

・高校生における自己臭恐怖と正視恐怖　無記名アンケートによる横断的調査.
児童青年精神医学とその近接領域 34(3):261-267,1993.（共著）

・矛盾的相即が自ずと生きる精神療法-相即（療）法試論-　日本ロールレタリング学会役割交換書簡法・ロールレタリング研究　5 :1-11,2005.

・矛盾相即的精神療法.Comprehensive Medicine 全人的医療 9 (1) :37-46, 2008.

シンポジウム

哲学無き現代医学教育の問題点―医学哲学の観点から―

杉岡　良彦
一般財団法人信貴山病院分院　上野病院診療部、医療倫理教育部長

かつて座学中心であった医学教育が、現在では臨床能力の向上も視野に入れた内容となり、より効率的に医学を学べるように改善されている。一方で、教養教育は大幅に縮小された。医学は人間を対象とする科学的営みであるが、これまで人間に関する深い議論を行ってきたのは哲学や宗教学などの人文社会科学である。こうした学問の軽視は結果的に医学生に生物学的人間観のみを教え、フランクルが強調したような「人間の苦悩への理解や生きる意味への理解」を乏しいものとする。医学哲学は、医学とは何かを問う学問であるが、発表者は医学哲学の立場から、医学が科学論、人間観、医療倫理・医療制度という三つの座標軸に規定されつつ、実現すべき価値を目指す学問であると理解する。医学哲学は、医学教育で軽視される人文社会科学と専門課程を架橋する役割を担い、医学生に医学の全体像と患者の全人的理解、ならびに医師としての使命感を獲得させるためにも不可欠な学問分野であると考える。

キーワード：医学哲学、医学教育、教養教育、人間観、生きる意味

プロフィール

◆ 杉岡　良彦（すぎおか　よしひこ）

＜現職＞
一般財団法人信貴山病院分院　上野病院診療部、　医療倫理教育部長

＜略歴＞
1990 年　京都大学農学部卒（農学原論講座）
1998 年　京都府立医科大学卒
2004 年　東海大学大学院医学研究科博士課程環境生態系専攻修了
2005 年～2016 年　旭川医科大学医学部医学科健康科学講座助教、講師
2016 年　札幌太田病院精神科臨床研究部長
2017 年より現職
2020 年より京都府立医科大学非常勤講師（「医学哲学」「現代医療の人間観」担当）

医師、博士（医学）、精神保健指定医、日本医師会認定産業医、臨床研修指導医

＜専門分野＞
医学哲学（医学概論）、精神医学

＜著書＞
著書『医学とはどのような学問か：医学概論・医学哲学講義』（2019、春秋社）、『哲学としての医学概論：方法論・人間観・スピリチュアリティ』（2014 年、春秋社）など。

＜受賞＞
『哲学としての医学概論：方法論・人間観・スピリチュアリティ』において
2015 年　日本医学哲学・倫理学会　学会賞
2015 年　湯浅泰雄著作賞

シンポジウム

サルトジェネシス（健康創成論）と医学教育－痛み医療の臨床から－

青山幸生
東邦大学医学部麻酔科学講座（大橋）客員教授

サルトジェネシス（健康創成論）をどのようにして医学教育に生かしていくのかという大命題に対して、①具体的にそれをどのように取り入れて教育し、②教育の最終的な目標をどこに置くのかなどを痛み医療の現場から考えてみたい。

サルトジェネシスは、イスラエルの健康社会学者であった Aaron Antonovsky(1923-1994)によって提唱された新しい健康に関する概念で、病因とは別に患者の持つさまざまな潜在能力を探り、それを有効に生かすことで患者の健康を回復させようとする健康を中心とした考え方である（健康中心主義）。

演者は、医学教育において、１）医学部 1，2 年生を対象とした東洋医学概論でサルトジェネシスがどのようにして誕生し、その考え方がパソジェネシス（病因追究論）とどう違うのか、２）卒後の前期研修医を対象とした実践漢方講座では、サルトジェネシス的方法論を代表する伝統的東洋医学、特に漢方医学の痛み医療への応用について教育を行っている。さらに、３）麻酔科専門医を対象としたペインクリニック（疼痛外来）においては、痛み医療の実臨床の立場から具体的方法論として「パソジェネシス and/or サルトジェネシス」の実践について、実際に医学方法論の適応と限界が存在することを念頭に置きながら、従来のパソジェネシス単独では問題解決に至らないようなケースに対していかにサルトジェネシス的方法論を導入して問題解決に導いていくか、そして最終的には、身体・心理・社会・実存的医療モデルに立脚した「全人的医療」を実践できる医療者教育を目標に行っている。

最後に、サルトジェネシスの考え方は、全人的医療の理解・実践の上では必須であると思われる。

キーワード：サルトジェネシス、パソジェネシス、医学教育、痛み医療、全人的医療

プロフィール

◆ 青山 幸生（あおやま ゆきお）

＜現職＞
東邦大学医学部麻酔科学講座（大橋）客員教授
医療法人社団青秀会　車田病院　理事長・院長

＜略歴＞
1983 年　東邦大学医学部　卒業
1986 年　東邦大学医学部　助手（麻酔科学研究室）
1991 年　南カリフォルニア大学(米国)麻酔科へ留学(LAC+USC Medical Center, Los Angles)
1996 年　東邦大学医学部　講師（麻酔科学第 2 講座）
2001 年　東邦大学医学部　助教授（麻酔科学第 2 講座）
2009 年　日本歯科大学総合診療科 1　臨床教授
2011 年　東邦大学医学部麻酔科学講座（大橋）准教授
2017 年　東邦大学医学部　客員教授、医療法人青秀会　車田病院　理事長・院長
現在に至る

＜専門分野＞
麻酔科学、ペインクリニック、心身医学、東洋医学

＜役職＞
1）日本慢性疼痛学会　理事（第 41 回日本慢性疼痛学会会長）
2）日本実存療法学会　理事（第 9 回日本実存療法学会会長）
3）日本疼痛心身医学会学会　理事（第 28 回日本疼痛心身医学会会長）
4）日本心理医療諸学会連合（UPM）　理事
5）日本慢性疼痛学会　監事
6）日本アプライド・セラピューティクス学会　評議員
7）日本ペインクリニック学会東京・南関東支部　運営委員
8）日本行動医学会　評議員
9）日本疼痛漢方研究会　常任世話人（第 33 回日本疼痛漢方研究会会長）
10）学会誌「Comprehensive Medicine－全人的医療」 査読委員
11）日本疼痛漢方研究会誌　編集委員

＜資格＞
日本麻酔科学会　麻酔指導医、日本心身医学会　研修指導医、日本東洋医学会　漢方専門医
日本ペインクリニック学会　専門医、日本慢性疼痛学会　専門医、国際実存療法士

シンポジウム

「医のこころ」を伝える場を創る　－ユーサイキアの実現を目指して－

喜山克彦
喜山整形ハーブクリニック　院長

全人的医療は、自然科学に加えて心理学、哲学、社会学、教育学などの人文科学や社会科学を包括したものである。全人的医療教育の場（クリニック）を創り上げ、スタッフに対する医学教育を行い、医学哲学を語ることができるためには、それにふさわしい経営論に基づくマネージメントが不可欠である。アブラハム・マズローは、理想的な経営が行われる場としてユーサイキア（Eupsychia）を提示した。そしてユーサイキアン・マネージメントの必要性を説いた。

当院は、ミッションとして「地域における慢性疼痛に対するプライマリ・ケアの理想的医療モデルの構築」を掲げている。

本報告では、当院におけるマズローの理論を中心としたユーサイキアン・マネージメントへの挑戦、実際のスタッフへの教育内容、および、その挑戦を通して得られたことを提示する。そして全人的医療教育機関を目指す一般開業医におけるユーサイキアン・マネージメントについて考察する。

キーワード：全人的医療、地域医療、開業医療、ユーサイキア、ユーサイキアン・マネージメント

プロフィール

◆ 喜山 克彦（きやま かつひこ）

＜現職＞
喜山整形ハーブクリニック　院長

＜略歴＞
鹿児島県与論島出身
1962 年　鹿児島県指宿市生まれ
1983 年　東京学芸大学教育学部中退
1992 年　琉球大学医学部医学科卒業
1992 年　琉球大学医学部附属病院整形外科入局
2004 年　浜松医科大学心療内科研修
2010 年　静岡県富士市に整形外科クリニックを開業

＜専門医・資格＞
日本整形外科学会認定専門医
日本東洋医学会認定専門医
上級国際実存療法士

＜所属学会＞
日本整形外科学会
日本肩関節学会
日本腰痛学会
日本臨床スポーツ医学会
日本運動器科学会
日本リハビリテーション医学会
日本心身医学会
日本疼痛心身医学会
日本実存療法学会
日本慢性疼痛学会
日本運動器疼痛学会

シンポジウム

鍼灸臨床実習における態度教育の展開

廣門靖正
国際鍼灸専門学校附属鍼灸治療所　所長

伝統的東洋医学は、人間を包括的、概念的にとらえ、その主な方法は四診（望・聞・問・切）により、詳細に人間を観察するところから始まる。患者を絶えず包括的に診、その適応は主に機能的病態、致死的病態が中心である。心身医学も絶えず身心一如の視点から患者自身の行動変容、すなわちセルフコントロールを通して同じ目的を追求する。プロフェッショナルとして成長するためには、知識・技術・態度の教育は、相互主体的であり、かつ相互依存的である。教育も科学である。治療者としてのアイデンティティを獲得するための態度教育について考える。

筆者の研究「臨床実習での学びの様相」では、以下の５つのカテゴリが抽出された。

Ⅰ．愁訴を共感する困難性（29%）、Ⅱ．鍼灸師としてのアイデンティティの形成（28%）、Ⅲ．より良い生活習慣の気づきにつなげる行動変容（19%）、Ⅳ．治療者―患者関係構築の困難性（14%）、Ⅴ．技術をみつめる（10%）、であった。この５つのカテゴリは Bloom，B．S．による教育目標分類に含まれていた。学生は、治療者―患者関係の成立にコミュニケーション技術を駆使している姿、患者自らが問題に気づき治療者の助言により健康を創生するプロセスを体験していた。このことは鍼灸臨床においてサルトジュネシスの場が提供され、そこに、身体・心理・社会的問題への共感に加え、患者固有への実存性への共感が生まれていた。学生は、治療者―患者の関係性のなかで「治療的自我」に目覚めていることが示唆された。

態度教育は、基本的アイデンティティに関わる問題としてとらえられているが、最大の問題は教育、評価の困難性であった。この教育方法に行動科学的方法の導入が必須である。具体的には、WHO（世界保健機関）が推奨し、世界的に実践されているバリント方式（医療面接法、グループワーク）を導入し、全人的医療を実践していくことが今後の課題である。

キーワード：臨床実習、態度教育、バリント方式、全人的医療

プロフィール

◆ 廣門 靖正（ひろかど やすまさ）

＜現職＞
国際鍼灸専門学校附属鍼灸治療所　所長

＜略歴＞
1991 年　国際鍼灸専門学校卒業
1991 年　あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師国家資格取得
1993 年　筑波大学理療科教員養成施設卒業
1993 年　国際鍼灸専門学校専任教員（現在に至る）
2002 年～2005 年　浜松医科大学心療内科研究生
2006 年～2009 年　浜松医科大学非常勤講師
2006 年～2017 年　東邦大学医学部医学科客員講師
2019 年　国際鍼灸専門学校付属鍼灸治療所所長（現在に至る）

＜専門分野＞
東洋医学（あん摩、はり、きゅう）、慢性疼痛、酸化ストレス防御系

＜その他＞
2003 年～2015 年　日本実存療法学会監事
2006 年　日本慢性疼痛学会理事（現在に至る）
2009 年　日本疼痛心身医学会理事（現在に至る）
2016 年　日本実存療法学会理事（現在に至る）
2021 年　低血糖・血糖値スパイク研究会理事（現在に至る）

＜所属学会＞
日本心身医学会
日本東洋医学会
全日本鍼灸学会
日本温泉気候物理医学会　他

シンポジウム

機能性身体症状を呈した身体的苦悩（BD）に対し TD チームアプローチを行い行動変容に至った１例

市川亜弥、喜山 克彦、加藤晃己
喜山整形ハーブクリニック

当院では、医師、理学療法士、鍼灸師などによる専門横断的（transdisciplinary；TD）チームアプローチを行っている。本発表では、機能性身体症状を呈した身体的苦悩（bodily distress；BD）に対し TD チームアプローチを行い行動変容に至った 1 例について報告する。

【症例】38 歳、女性、介護施設の厨房勤務。X 年 6 月中旬、左上下肢のしびれと痛み、舌の違和感、めまい、立ちくらみ、イライラ感などの症状が出現。同年 6 月下旬、当院を受診し、BD と診断した。患者はホメオスタシスの歪みを生じており、心理的には不安が強い状態であった。医師、理学療法士および鍼灸師を中心とした TD アプローチを行った。身体的状態にはホメオスタシスの歪みに対する治療を行った。心理的状態には、それぞれの治療者はバリント方式医療面接を行い傾聴に徹した。患者は徐々に内向きの心理状態から外向きへのそれと変容していった。

【考察】傾聴には深さの違いがある。ロジャースの来談者中心療法におけるエンパシー（empathy）は傾聴のレベルが深く「自己投入的理解」と表現されることがある。身体科の治療者による深い傾聴は、その治療構造の違いにより困難である。身体的治療の利点は身体から心理へのアプローチが可能であることと考える。またチームアプローチの利点は、複数の治療者が傾聴を行うことで、自己成長のための、より安心感のある大きな場を提供できることと考える。

キーワード： 専門横断的（TD）チームアプローチ、身体的苦悩（BD）、
バリント方式医療面接、傾聴、鍼灸師

プロフィール

◆ 市川 亜弥（いちかわ あや）

＜現職＞
喜山整形ハーブクリニック 総合リハビリ科・鍼灸師

＜略歴＞
1985 年生まれ　静岡県富士市出身
2004 年　株式会社グローバルスポーツ医学研究所入社
2011 年　東京医療専門学校卒業
2020 年　喜山整形ハーブクリニック入職

＜専門分野＞
鍼灸

自身の怪我をきっかけに、現役復帰のサポートをして頂いた鍼灸整骨院の先生方のように怪我に悩む方のサポートがしたい、と夢を持ったことをきっかけに鍼灸の道を目指した。
日々多くの方と接するうちに、悩みは怪我で辛いだけではないと気づいた。喜山先生の元で一から全人的医療を勉強し、多くの方の笑顔の為に役立てられるよう努めている。

市 民 公 開 講 座

食の専門家育成現場からの提言

井上恵

学校法人長岡総合学園　悠久山栄養調理専門学校　校長

義務教育における給食指導は教育課程外に位置する。しかし、学校給食における生徒の喫食状況には、言葉以上のヒントがある。おいしく食べることのできない生徒にはなんらかの生徒指導上の課題がある。また、朝食を摂らない、あるいは摂れない生徒は決して少なくない。一方、認定こども園の保育士からは「スナック菓子しか食べない幼児、噛む力や飲み込む力が弱い幼児、濃い味に慣れてしまった幼児が増えている」という嘆きをきく。同様の傾向をもつ児童生徒に悩む小中高教員も多い。ところが、その教員自身にも食の課題が散見されるのが現状である。かように若年者への食指導には課題が多く、のちのさまざまな病態につながるであろう。現在勤務する専門学校では、小中高で不登校や摂食障害など、不具合を抱えてきたであろう学生が心身の安定を得ていくケースに毎年出会う。栄養学の知識を生かしライフサイクルや病態に応じた献立作成を学び、実際の調理、試食を頻回に繰り返す。これにより心身の安定を得、同時に「望ましい食習慣」が自然と身につくのであろう。栄養指導を担う栄養士、調理を担う調理師の役割や、彼らの養成において大切にしていることを述べたい。

キーワード：食の役割、食をめぐる哲学、栄養士調理師の役割、その強みと弱点

プロフィール

◆ 井上 恵（いのうえ めぐみ）

＜現職＞
学校法人長岡総合学園　悠久山栄養調理専門学校　校長

＜経歴＞
大阪府出身
お茶の水女子大学理学部数学科卒業
同大理学研究科修士課程数学専攻修了　理学修士
主として新潟県中学校教諭および管理職として奉職
2019 年より現職
2020 年　上級国際実存療法士取得